

福江島：生態系

五島列島の生物多様性は、異なる気候帯の種が多様に存在する一方で、固有種が比較的少ないという特徴がある。この珍しい組み合わせは、島々の位置と地質学的歴史によるものだ。

五島列島は、九州の西岸沖に位置し、温帯の東シナ海と熱帯の暖かい海が会う場所である。対馬海流が南から流れ込み、五島の気候を暖め、亜熱帯の種が生息できるようにしている。

五島列島には、2 万年前の氷河期の最盛期から生息している種もいる。当時、五島列島は九州から南西に延びる大きな半島の一部だった。やがて氷河の融解によって海面が上昇し、五島列島は九州から切り離された。とはいえ、2 万年という歳月は進化論的に見れば比較的短いもので、五島列島の生物種は九州の生物種とさほど分岐していない。

地質学的な要因が重なり合い、海中生物が棲息する海洋環境が形成された。

島の東側には東シナ海の浅瀬があり、西側には沖縄トラフの深海がある。ユーラシア大陸の分水嶺から冷たい海水が流れ込み、対馬海流が暖かい海水を運んでくる。一方、五島の山々からの流出水は、森から海へと栄養分を運び、海峡を横切る強い潮流によって分散される。

このような多様性は、海だけでなく空にも見られる。五島列島はアジア大陸と日本列島の両方に近いいため、渡り鳥や蝶の重要な中継地となっている。

主な生物

福江島で見られる興味深い種は？

ハチクマ： ハチヤスズメバチの幼虫を食べることからその名がついた。秋になると、何万羽ものハチクマが大陸に渡るため、福江上空を埋め尽くし、島の南西部の岬に集まってくる。

ゲンジボタル： 北海道を除く日本列島全域の淡水域に生息する。不思議なことに、福江のゲンジボタルは他の地域のゲンジボタルよりも発光速度が速い。

ドウクツミズハゼ： 福江の浸水した溶岩洞窟に生息する珍しいハゼ。1968 年に井穴溶岩トンネルで初めて発見されたが、その後、日本の他のいくつかの場所で見ついている。体長はわずか 5 センチほどで、光のない生息地のため目は退化している。

サンゴ： 五島近海には多くの種類のソフトコーラルやハードコーラルが生息している。福江港からほど近い、隣の多々良島の近くでは、ダイバーが約 42 メートルに及ぶ 1 つのオオスリバチサンゴのコロニーを発見した。これほどの大きさになるには、何世紀もの成長が必要なのだ。

ツバキ： 五島列島のシンボルともいえるこの丈夫な花は、農作業に欠かせない防風林として植えられた。福江島には「玉之浦」というユニークな品種があり、1947 年に発見された福江市にちなんで

名付けられた。濃いピンク色の花びらの先端が白いのが目を引く。

大型のシダ： アジア原産で、高さ 6 メートル以上にもなる珍しいシダ植物。五島のものは天然記念物に指定されているが、福江では生息地の消失や違法採集により、ほとんど姿を消してしまった。そのため、野生のシダが残っている場所は厳重に管理されているが、栽培されたものは福江城の近くにある福江文化センターで見ることができる。

ルビメユリ： 鬼岳では 3 年に 1 度、山頂に木が生い茂らないようにするための管理焼却が行われる。そのため、この日本で最も小さい品種の繊細なユリのような山の草花は、日光を奪い合う必要がない。そのおかげで、7 月から 8 月にかけて鮮やかなオレンジ色の花を咲かせることができるのだ。

アサギマダラ： 春には日本列島を北上し、東北地方まで移動する。秋には南下し、時には沖縄、台湾、香港まで約 2,500km の距離を移動する。チョウの寿命は半年ほどなので、秋に南下するチョウは春に南下したチョウの子孫である。10 月から 11 月にかけて、福江ではこの色鮮やかな旅人をたくさん見ることができる。

クリハリス： このリスは台湾、インド、東南アジア原産だが、日本にも生息するようになった。樹皮をかじり、ツバキなどの作物の樹木に被害を与えるため、問題のある外来種に分類されている。